第I部

事件

一九九〇年、冬

I

十二月二十四日、クリスマス・イヴの夜のことだった。午過ぎから厚く空を覆っていた鈍色の雲が、自分自身の重さに耐えかね、次第次第に低くたれこめてきて、とうとう我慢しきれなくなったかのように小雪がちらつき始めた。

小林修造は、テレビで七時のニュースが終わったので、表のシャッターをおろそうと、ぬくぬくとしたリビングを離れて、店の正面に出ていった。今日は一日電器店の方は営業せず、開けていたのは煙草屋の方だけだったから、コンクリートのたたきは冷え切っていた。シャッターに近づく途中で、くしゃみが二つ飛び出した。

鼻をグズグズいわせながら、シャッターを引っ張りおろす長い鈎を手に、外へ足を踏み出す。そのとき、店の前の歩道にある公衆電話のボックスのなかに、誰かいることに気づいた。一見して若者――まだ子供であると、すぐにわかった。

その子はこちらに背を向けていたので、顔が見えなかった。濃いベージュ色のジャケットの背中と、そこに背負っている赤っぽい色合いの、薄べったいナップサック――今はそういう呼び方をし

ないと、孫たちに何度も教えられるのだが、ちゃんと覚えられたためしがない——。ジーンズに運動靴。この街のどこにでもいる男の子のいでたちで、そういう男の子たちの八割方がそうであるように、この子も姿勢が悪かった。どうして今の子供はこう、そろいもそろって猫背なのだろう？

小林電器店にとってこの師走は、新装開店をして初めて迎える年の暮れだった。住まいと店舗の増改築が終わったのが五月末のことで、すぐに娘夫婦が移り住んできた。それまで夫婦二人きりだった静かな暮らしに、小学生の孫たちのにぎやかな声が混じるようになって、半年が経ったことになる。

そして今日は、孫たちとひとつ屋根の下で迎える初めてのクリスマス・イヴだ。修造の心は弾んでいた。何か好きなものを買うようにと手紙を付けて、現金書留で金を贈るのではなく、孫たちを連れてデパートへ出かけていって、プレゼントを選ぶことができたのだ。娘も修造たち夫婦のために、何かプレゼントを用意してくれているらしいし、朝から台所を出たり入ったりして、何か手の込んだ料理をこしらえている様子もある。

人生晩年の幸せは、すべての者に平等に用意されているものではない。列に並んだ者には誰にでも手渡されるものではない。待ってさえいれば手に入るものでもない。並んだ列が間違っていなくても、自分の分はなかったということだってあるし、そもそも並ぶべき列が最初から存在していないことだってある。だから修造は幸運だった。

今朝方、妻と娘と三人で朝の食卓に向かっていて——娘婿は、早朝から故障したエアコンの修理に出かけていた——修造はしみじみと我が身の幸せについて語った。娘は照れたような顔をして、お父さんがそんなブンガクテキなことを言うなんて信じられないわねと笑った。自分の幸せについて思うことが文学的なことなのかどうかはさておき、修造は娘のそういう反応もまた嬉しかった。彼女の笑顔は、彼女が実家から遠く離れ、転勤の多い夫に従って日本各地を転々と移り住んでいたころに比べて、確実に三〇ワットほど明るくなっていた。

——だけどね、ゴールデン・ウィークとかクリスマスとかお正月って、実は自殺者が多い時期なんだって。気持ちが落ち込んでいたり、不遇な人にとっては、自分以外のすべての人たちが幸せそうに楽しそうに見えるってのが、いけないんでしょうね。

娘はそんなことも言った。確かにそういうものだろうと、修造は思った。彼自身、クリスマスや正月に、幼子の手を引いて歩いている同年輩の男を見かけると、必要以上に胸をかきむしられるような気がしたことがあった。

電話ボックスのなかの男の子を見かけたとき、最初は、この子も今日の幸せ者の口だろうと、特に気に留めることもなく思った。なにしろクリスマスだ。ガールフレンドに電話しているのだろう。デートの約束かもしれない。今時の子は、そういうことに対してはとても積極的で、足が速いのだから。

この電話ボックスは、日頃から、修造が顔や背格好を記憶しているだけでも、ざっと七人くらいの〝常連〟のティーンエイジャーたちを抱えていた。彼らはたいてい、夜八時を過ぎたころになってここにやってきて、最低でも一時間は話し込んでゆく。自宅には電話があっても自室にはないのか、あっても親に盗み聞きされる危険のある場所では話したくないのか、どちらかだろう。毎夜彼らが使い捨ててゆくテレフォン・カードを拾って捨てるのが、修造の朝の仕事のひとつになって、もうかなりの時が経つ。もっともそれは、ボックスの内側に張りつけられるピンクちらしを剥がし

て捨てるという作業よりは、ずっと楽なのだけれど。

昼間は昼間で、学校帰りの少年少女たちが、何の用があるのかわからないけれど、入れ替わり立ち替わり受話器にぶら下がって、笑ったりしゃべったりして飽きることがなかった。それでもまだ小林さんところはいいんだよ、目と鼻の先に交番があるから、悪ガキは来ないでしょう――家業の酒屋を息子に譲ったとたん、コンビニにされてしまった商店街の古顔の一人が言っていたことがある。うちなんざあんた、ひどいもんだよ。ケツの青い穀潰しどもが一日中電話をふさいで、テレクラにかけたり、薬の売り買いなんかやっていやがるんだからね。

修造はうんと背伸びをして、シャッターの取っ手に鈎を引っかけた。引っ張ると、シャッターが降りてくる。ガラガラと大きな音はしないけれど、多少は騒がしい。それが気になったのだろうか、電話ボックスのなかの男の子が、受話器を耳にあてたままつとこちらを振り返り、そのとき、修造とまともに目があった。

その子は今日の幸せ者ではなかった。それに、このボックスの〝常連〟たちであるハイティーンの男の子や女の子たちよりも、なお幼いように見えた。たぶん中学生だろう。

彼は笑っていなかったし、楽しそうにも見えなかった。それどころか、少しばかり泣きそうになっているように見えた。修造は思わずシャッターをおろす手を止めて、電話ボックスの薄汚れたガラス越しに、しげしげとその子を観察した。

この電話ボックスが小林電器店の目の前に設置されたのは、娘が結婚した年のことだから、もう十二年前のことになる。以来、けっして好んでそうしてきたわけではないが、このボックスの〝常連〟たちを観察し続けてきた修造は、過去三回、彼らの行動に介入せざるを得なくなった経験があった。

一度は、男女混ぜて五、六人のグループがこのボックスを取り囲み、代わる代わる受話器を握りながらバカ騒ぎをしていて、その騒音があまりにけたたましかったので、少し静かにするようにと注意しに行ったのである。戦前からの住人の多いこの街には、まだまだそういう小うるさい頑固オヤジや頑固ババアが生存しているのだ。道端の不作法を、黙って見過ごすことはできないのだ。そのことを、きっちりと思い知らせてやらねばならぬ。

しかし、頑固オヤジは殴られそうになって、危ういところで逃げ出した。騒ぎを聞きつけた巡査が飛んできてくれて事なきを得た。確かに、交番が近くにあると、こういうときは助かるものだ。

二度目のときは、高校生らしい女の子が、彼氏との別れ話がこじれてヒステリーを起こし、ボックスのなかで左手首を切って座り込んでいるのを発見したのだった。幸い傷は浅かったのだが、女子高生はどうしても救急車を呼んでくれと言い張って聞かず、取り乱して泣くばかりなので、仕方なしにボックスの電話から一一九番をした。その後、彼女がどうなったのかはわからない。それ以降はこのボックスに電話をかけにこなくなってしまったからである。むろん、彼女の親が挨拶に来ることもなかった。

三度目のときは、もう少し深刻だった。やはり女子高生だったが、夜十時頃にこのボックスから電話をかけているとき、暴漢に襲われたのである。修造が悲鳴を聞いて飛び出してみると、黒ずくめののっぽの男が、ボックスから少女を無理矢理引きずり出そうとしているところだった。近所の人たちも駆けつけてくれたし、誰かがすぐに交番に走ってくれたので、またまた巡査が飛んできた。それでも、暴れる男を取り押さえるまで三十分ほどかかってしまった。二十歳ぐらいの学生風の男

だったが、被害者の女子高生の話では、彼女の元ボーイフレンドであるそうだった。
この件については、数日後に女子高生の母親が訪ねて来てくれたので、その後の様子を知ることができた。女子高生は、年上のそのボーイフレンドと別れたつもりだったのだが、相手はそれを承知せず、何ヵ月もしつこくつけ回されたり、脅かされたりしていたという。今度のことで警察が介入し、これでやっと手が切れると、親娘でほっとしているところだという話だった。
三件とも、修造と妻の一人娘が多感な年代であった頃には、親の頭をよぎる極端な悪夢としては想像がついても、現実に我が娘の身の上に降りかかってくることなどあり得ないと思われた出来事ばかりだった。特に二件目の自殺未遂の件などは、修造にも妻にも、少女の内心を計りかねる出来事だった。〝命を粗末にする〟という言い回しそのものが、死語となりつつあるのだと、そのとき二人で話し合ったものである。
三つの事件以来、修造は、この電話ボックスで起こる出来事は――特に、若者たちを巻き込んで起こる出来事は――どんどん世間から離れて穏和な老後を送ろうとしている自分たち夫婦にとっての貴重な〝窓〟なのだと考えるようになった。そこから見えるものは、どれほど信じ難くてもたぶん真実で、ひょっとすると時代の最先端の心情なのかもしれない。ただしその〝最先端〟は、怖ろしく先が鋭いが脆いものでできており、ある限られた期間だけ、時代の流れの一端がそこにあるのだろうけれど、けっして長続きはしない。というより、ここに映し出される心情が長続きして一般化するような社会だったら、それはもはや社会とは呼べないのだろう。少なくとも、昭和七年生まれの修造はそう思う。
それだから修造には、この電話ボックスで起こる出来事を右から左に流してしまわないという、

一種のクセがついていた。今、このボックスのなかで修造と視線のあったこの男の子は、そういう意味では、面倒な相手に出くわしたのかもしれなかった。
男の子は修造の目を見ると、怯えたように顔をそむけて、また背中を向けた。受話器に向かってしゃべり続けているようだ。修造はよくよくその子を観察した。ジーンズの裾が雪で濡れている。ジャケットの肩の上にも溶けかかった雪が載っている。男の子はここまでかなり長い距離を歩いてきたか、そこそこ長い時間屋外にいたのだけれど、肩の雪が溶けきるほどの長電話をしてはいないということだ。
男の子は電話を切った。気のせいか、わざと大きな音をたてて受話器をフックに戻したように見えた。人が、電話の相手に対して、あるいはそんな電話をかけた自分自身に対して怒っているときに、よくそうするように。修造は一歩前に出た。
男の子はボックスの折戸を押して外に出てきた。まだ修造がそこにいることに気づいて、さっきよりももっと怯えた顔をした。この子はいわゆる不良ではないなと修造は思った。日頃から悪いことをし慣れている少年ならば、自分の存在を見咎める大人の視線を跳ね返す術を身につけているものだし、その前にそもそも、おどおどしたりして大人の注意を引きつけたりはしないものだ。
「何か困ってるのかい」と、修造は声をかけた。こういう場合にはこれがいちばん無難な口切りの台詞なのだと、経験でつかんだ言葉だった。自転車が壊れたのかい？　待ち合わせの相手と行き違ったのかい？　出先で急に具合が悪くなって、おうちの人に迎えに来てもらうのかい？　それなら、こっちへ来てなかで待っておいで。
男の子は黙っていた。返事に困っているようだった。彼の目がうろうろと動くのを見て、修造は

ひどく懐かしいものを見た気分になった。彼が子育てをしていたころの子供たち、彼自身が子供だった時代の子供たちは、嘘をついたり隠し事をしたり、大人に知られてはバツが悪いようなことがバレて追及されたりしたとき、みんなこんな目をしたものだ。

これは、どこまで本当のことを話したらいいかと迷う目だ。どれくらいまでうち明けたらカンベンしてもらえるだろうか、カンベンしてもらいつつも、秘密を共有する友達を裏切らずに済む妥協点はどこだろうか、と。今の子供たちは違う。最初からカンベンしてもらう気もなければ本当のことを言う気もないから、瞳をうろうろさせることなどまるでない。少なくとも、この電話ボックスという〝窓〟をよぎった子供たちはそうだった。

「いえ、あの、大丈夫です」

男の子はやっと口を開いてそう言った。内気な女の子みたいな声だった。言葉と一緒に、彼の呼気が、できそこないの幽霊みたいな白い固まりになって吐き出された。

近くで見ると、男の子は泣いているのではなさそうだった。頬が濡れて見えるのは、降りかかった雪が溶けているからだった。

ただ、ひどく歩き疲れているように見えた。ほとんど疲れ果てているように見えた。この年頃の子供には珍しいことだった。

「そんならいいが」修造は言って、わざと難しい顔をした。「もう夕食時だよ。子供が一人でうろうろする時間じゃない。早く家に帰りなさい」

お父さんそんな余計なことをすると、おせっかいなうるさいオヤジだって、刺されちゃうわよ——娘ならそう言うだろう。だが修造は、この男の子ならそんなことをするまいという自信があった。

「はい、そうします」

男の子は言って、わずかに頭を下げた。もっとも、ただうつむいただけだったかもしれない。修造は彼の後ろ姿を見送り、半分閉じたシャッターの方へと歩み寄った。

そのとき、二メートルほど先で、男の子が振り返った。また修造と目があった。修造は止まった。

だが、何も起こらなかった。

男の子はすぐに前を向いてしまい、振り向いたときよりも足を速めて、小雪のなかをどんどん遠ざかって行ってしまった。男の子が角を曲がり、ベージュ色の背中が見えなくなると、修造は何となく顔をしかめた。

ちらちらと降る雪は、凍った歩道をうっすらと白く覆っている。足跡がかすかに残るくらいに。男の子の足跡も点々と続いている。

彼の歩いた跡を目でたどると、振り向いたところで、ちょっとだけ足がよれていた。それは、そこで彼の心が一瞬だけよれたことを、ありありと顕わしていた。あの子は何か言いたかったのではないか、本当に何か困ったことに巻き込まれていたのではないかと、にわかに不安な気持ちになって、修造は立ちすくんだ。道端の不作法を見逃すことのできない小うるさいオヤジは、持ち前のおせっかいで、もうちょっとあの男の子に踏み込んでみるべきではなかったか。

遠い昔のことを、不意に思い出してしまった。この感覚——昔にも体験したことが、確かにあった。